

## 資 料

## MMPI I に対する回答の妥当性について\*

防衛大学校 岩 脇 三 良\*\*

## I 序

いわゆる質問紙形式の性格検査に対し、いろいろの非難が向けられているが、そのひとつに、質問項目に対する回答が被検者によつて歪められる可能性があるという声がある。

自分を普通以上によくみせようとしたり、自己の異常性を誇張しようとする、意識的であれ、無意識的であれ、症状に対する態度いかんによつて、回答は変質するというのである。なるほど、入社試験のときなどには、各臨床尺度の平均得点は標準のそれより低くなるといわれているように(3)、質問紙法による性格検査の得点が被検者の態度で変動しうことは事実であろう。しかし、現行の質問紙では、この欠陥を克服するための努力が払われていて、いくつかの方法が考えられており、上記のような批判はかならずしも正鵠を得ていない。回答の歪みを補正してくれる方法のひとつとして、回答の信頼度を高めてくれる指標の利用をあげることができよう。臨床心理学においても、今日なおその重要性を失っていないMMPIについて、この問題を考察してみよう。

## II 妥当性尺度

MMPI では、結果の信頼度を検討するために、疑問点(?), 虚構尺度(L), 妥当性尺度(F), 修正尺度(K) がつくられている。

## a) ? 点

? 点数は回答を歪めてやろうとする態度を表わすものではなく、正確を期そうとしたり、決断力が乏しかったり、融通がきかなかつたりする別の面に左右されると考えた方がよいようである。もし、被検者が正直に答えれば、? 点が高いと、プロフィールの高さは一般に

低くなるであろう。? 回答数を他の全尺度に、問題数に応じて比例配分することも考えられるが、各診断尺度に関する質問に、? 回答数が比例して配分されていることはまれであろう。他の性格検査では、 $\frac{1}{2}$ 点として計算されるものもあるが、? 点の意味は多義的で、まだ、はつきりしたことがいえる段階ではなく、? 回答の処置には慎重をきした方がよからう。MMPI の場合、? があまりに多い時には、再検査するという程度に使うのがよいのではあるまいか。教示を与える際に、十分注意すれば、? 回答数が多くなることはかなりふせげるものである。

## b) L 尺度

社会的には望ましいが、実際に行なわれることはまれな状態を示す項目が15ある。原理的には、L 点の高いことは自分を好ましく見せようとしている意識的あるいは無意識的な態度を示す。心理学実験の経験のない被検者は一般に好ましい方向に回答を歪め、L 点は高くなり、ヒステリー性格の被検者も、やはり高くなるとされている。すると、心理学専攻生のように検査法の経験があるものには、L 尺度はあまり有効でないということになる。L 点が高いと、一般に、実際の得点は現実を得た各尺度の得点より高まると考えられる。

## c) F 尺度

普通の被検者であれば、ごくわずかの頻度でしか応答しないと思われる項目64からなる。質問の内容を理解していなかつたり、でたらめに答えたり、不注意のため間違つて応答したりするとF点は高まる。つまり、F点が高いと、他のプロフィールを妥当しないものにする。まじめな態度で検査にのぞんでいるかどうかを検出するのに使用されるのがF尺度であるとされている(3)。しかし、病的症状にあるものはF点が高くなる可能性があるとしており(4)、好ましくない方向に回答を変質しようするとF点は高くなるのではないかと考えられる。偶然に答えたり、好ましくない方向へ故意に回答を歪めたりすると、臨床診断尺度のプロフィールよりもFの方

\* Simulation in the MMPI.

\*\* by Saburo Iwawaki (Defense Academy)

が高くなる可能性が考えられる。

#### d) K尺度

K尺度の目的は 1) 心理学実験の経験あるものを含めて、回答を故意に変質させようとする傾向のある被検者を見つけだすことにある。自分自身を実際以上にみせようとするK尺度は高まり、実際以下にみせようすると低くなる。したがって、K尺度は好ましい方向へ歪める被検者にも、好ましくない方向へ変質しようとする被検者にも、その検出に利用できる。2) 被検者が無意識のうちに回答に与える歪みの程度を看破する目的ももっている。その無意識の態度には、自己防衛的態度から誠実さ、過度の自己批判の傾向までが含まれることになる。K尺度は被検者の態度尺度、妥当性尺度であるとともに、防衛的態度を反映するのであるから、自己の弱点をかくそうとする隠蔽尺度であると考えられる。事実、このK得点によつて、各被検者の得点は修正されている。K尺度による修正は最終プロフィールに及ぼす自己防衛的態度の影響を除去しようとして作成されたものである。しかし、この手続きでは好ましい方向への変質を修正するには役だが、好ましくない方向への歪みに対しては不完全であるといえる。

#### e) F-K指標

以上4つの尺度はMMPI のプロフィールの妥当性を検出するために構成された尺度で、MMPI の大きな特徴をなしている。しかしこれだけではなお不十分であり H. G. Gough<sup>(2)</sup>はどちらかの方向へ回答を歪める傾向を見破るために、粗点によるF-K差を用いるよう提案した。上記の妥当性尺度のうち、特にL, F, Kは被検者の態度だけでなく、人格特性とも対応し、これらの尺度が高いからといって、診断プロフィールを妥当性がないと断定してしまうと、特定の人格特性を示しているプロフィールまでも捨て去る危険があるという前提のもとに、この危険を避けるため、FとKの両尺度を組み合わせることが提案されたのである。好ましい方向へ歪めようするとF尺度は低く、K尺度は高くなり、好ましくない方向へ歪めようすると、F尺度は高くなり、K尺度は低くなる。という考えに立脚している。H. G. Goughによると、F-K指標は好ましくない方向への歪みを検出するのに特に有効である<sup>(2)</sup>。

#### f) H<sub>s</sub>尺度

元来、健康状態についての異常な心配程度を測定する目的でつくられた尺度であるが、正常のパーソナリティをもつたものでも、身体的な弱みをいく分か訴えるものである。また、このH<sub>s</sub>尺度は微妙な内容をもつ質問から構成されているわけではなく、好ましい方向へ歪みや

すい。そのため、0.5K 修正値が加えられているしだいである。従来、文献ではあまり指摘されていないが、MMPI を適性検査のひとつとして使用した場合、H<sub>s</sub> 粗点が0あるいは1というものが相当いることに気づいた。好ましい方向への歪みを見破るのに、この尺度の粗点を利用してみてはどうであろうかと考えられる。

以上の考察から、すくなくとも、日本ではあまり試みられていないF-K指標と、H<sub>s</sub> 尺度とを回答の妥当性という問題の中心にして、適性検査のひとつとして実施された MMPI の結果を分析してみることにする。

### III 検査手続きと被検者

防衛大学校新入生に対し実施される適性検査のひとつとして、MMPI 東大改訂版(集団用)を用いた。325名の学生(満17才より満20才まで、平均年齢18才10ヵ月)を中講堂に集め、一斉に検査を実施した。回答のしかたを説明するにあたり、問題を読みとばさないよう注意すること、「ハイ」「イイエ」のどちらかに答えることを特に強調した。提出時間は特に制限を設けず、全回答完了しだい提出させた。

各被検者の得点を採点し、粗点とK修正値を加えた最終得点、さらに、本研究のために、F-Kが算出された。

### IV 結果およびその考察

K修正値を加え、全学生の結果を各尺度別に平均し、それをプロフィールに描いてみると Fig. 1 のようになる。東大版 MMPI により標準化されたTスコア50と比較すると、防大生の各臨床診断尺度の平均得点は、全般的に、標準より約5点低いことになるが、LとKはむしろ逆に、5点以上も高い。適性検査の一環として、MMPI を実施したため、好ましい方向へ歪めようとする態度、自己防衛的態度が反映して、全般的にLとKが高くなっているものと考えられる。

#### F-K指標

F-Kの平均値は-7.88, SDは6.53となり、Goughの正常成人群の値(M=-8.96, SD=6.97)<sup>(2)</sup>とほぼ等しい。

妥当性尺度(L, F, K)の粗点、ならびにF-K値の相関関係を Table 1 に示す。

LとKは好ましい方向への歪みを示す尺度とされているが、F-KとLはLとKの関係とちょうど逆の方向を示しており、L得点が高くなると、F-Kのマイナス値は大きくなるようで、F-KとKの関係は、Lよりもはるかに高いといえる。KとLが好ましい方向へ歪めよう

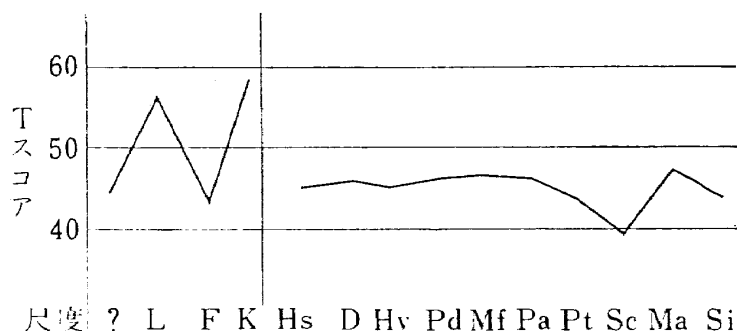


Fig. 1 全体の平均値によるプロフィール

Table 1 妥当性尺度ならびにF-K指標の相互相関

	F-K	L	F	K
F-K				
L		-.47	.77	-.75
F			-.20	.48
K				-.32

とする態度を反映すると考えるならば、F-Kは好ましくない方向への歪みを示す一指標と考えてもよいようである。

F-Kがプラスになったものの23名のL得点の平均を求めてみると、 $M=3.7$ ,  $SD=2.66$  となった。F-Kが+1のTスコアはわれわれの資料では64点である。Tスコア36 (=50-14) 以下のもの、F-K値でいうと-17以下を、F-Kがプラスとなったものの逆の極に属する群として、その平均値をとつてみた。この両群と全被検者群のL得点を Table 2 に示す。F-Kプラス群とマ

Table 2 平均L得点の比較

	N	L 得点	
		M	SD
全被検者	325	6.2	2.77
F-K +群	23	3.7	2.66
F-K high-群	30	7.8	3.29

イナス値で著しく大きいF-K群 (以下、high-群と称す)の平均L得点を比較してみると、 $t=4.720$   $.01 > p$  となり、high-群の方が有意にL得点は高い。Table 1 および2から、F-K指標を好ましくない方向への歪みを見破るのによい武器となると仮定できないであろうか。

F尺度

FのTスコア (東大標準による) 70以上のものと、30以下のものを全被検者から選び、そのKとLの粗点を Table 3 に示す。K得点の場合、Tスコア30以下の群 (low F群)の方が有意に高い。 $(t=4.298, .01 > p)$  L得点の場合は両群に有意の差は認められなかった。 $(t=0.714, .50 > p > .40)$

好ましい方向への変質、あるいは、自己防衛的態度を示すといわれるK尺度の得点をF得点と関連させて、比較すると、すくなくともFが著しく大きいあるいは小さい

Table 3 High F群とLow F群のK得点とF得点

N		K		L	
		M	SD	M	SD
High F群	6	13.6	2.04	4.5	2.64
Low F群	7	18.5	1.81	5.8	2.07

いときには、Fが低い群の方はKが高くなるといえる。しかし、これを被検者全般について比較してみると、逆の関係にあるとはいえず、あまり高い相関ではない。これはFに好ましくない方向へ歪めようとする態度の他に、前述した別の意味が含まれているからであろう。好ましくない方向へ歪めようとする態度を見破る手がかりとしてはF尺度だけよりはF-Kの方が有力のようである。

次に、F尺度が臨床診断度のTスコアで最も高い値を示すものよりもさらに高いTスコアを示す事例を求めてみた。これをF-K指標の+群、high-群および残りの群について、その出現率を Table 4 に示す。

Table 4 FのTスコアが臨床診断尺度のTスコア最高よりも高い事例数

	S <sub>s</sub>	事例数	出現率(%)
F-K +群	23.5	10	43.5
F-K high-群	30	0	0
残りの群	27.2	2	0.7

Table 4 からわかるように、Fが臨床診断尺度よりも高い事例はF-K指標が+であるものに著しい傾向である。この群以外の2名について、F尺度の得点をみると、2名とも14点となっており、全体のFの平均値よりも高い。こうして、F得点は、特に臨床診断尺度のTスコアより高いF (Tスコアで比較して)はF-K指標とともに妥当性に対する一指標として、好ましくない方向への変質を見つける手がかりになるのではないかと思います。

れる。F-K値が+で、FのTスコアが臨床診断尺度のどのTスコアよりも高い者10名中、8名が最低Tスコアが50より高い。F-Kがマイナス値で17以上の者ではTスコアが60以上になる臨床診断尺度は皆無であつたが、

(F-K)+群では、すくなくとも10尺度のうち、3つ以上はTスコアが60より高い。この事実だけでは、病状を反映しているものか、態度を反映しているものなのか、はつきりさせるだけの証拠にならないが、F尺度には単に不注意、質問の理解不足だけではかたづけられない要素が含まれており、再検討を必要とするように考えられる。

#### H<sub>s</sub>尺度

従来、あまり問題にされなかつたが、H<sub>s</sub>の粗点が他の妥当性尺度とどのような関係にあるかを示してみよう。全体のH<sub>s</sub>粗点の平均値は6.1, SDは4.23であつた。他の妥当性尺度との相関はTable 5のようになる。

Table 5

	L	F	K	F-K
H <sub>s</sub>	-.28	.55	-.46	.78

H<sub>s</sub>粗点とL粗点の関係はマイナスの相関とはいえ、非常に低い。H<sub>s</sub>尺度に関する質問は身体の病的徴候を問うはつきりした質問であり、適性検査の場合には特に好ましい方向へ変質しやすいものと考えられるが、正直さを示すL尺度とは非常に低い相関しかない。元来、L尺度は道徳性と正直さを混合したものであり、H<sub>s</sub>のように道徳性を含まない質問ではL尺度と一義的に対応しないのかもしれない。

H<sub>s</sub>には0.5K修正値が加えられる。Table 5から、H<sub>s</sub>が低ければ、Kは高くなるということになる。健康にみせようとする自己防衛的態度が働きうるからであろう。H<sub>s</sub>とFの関係はH<sub>s</sub>とKとは逆の意味で、一層密接である。H<sub>s</sub>が高いとFも高い得点を示すといえる。しかし、両者が高いことは病理状態にあることを示すのかもしれない。

F-K値とH<sub>s</sub>粗点の関係はかなり密接で、FよりKが大きいほど、すなわちマイナス値で大きくなるほど、H<sub>s</sub>は低いということになる。逆に、H<sub>s</sub>が高いとF-K値もプラス値で大きくなる。好ましくない方向へ変質しようとする態度を検出するのに有力な指標となりそうであると、すでに示唆しておいたが、H<sub>s</sub>粗点が高いことは態度の反映なのであろうか。それとも病状だけなのであろうか。あるいは両者が加わつたものなのであろうか。これだけの資料では結論できない。F-K値の両極群に

つき、H<sub>s</sub>の平均値をもとめると、(F-K)+群では、M=11.7, SD=6.10, (F-K) high-群、すなわち、F-Kがマイナス値で17以上の群では、M=3.3, SD=2.18であつた。自分をよくみせようとする、F-Kがマイナス値で大きくなるとすれば、同じ態度はH<sub>s</sub>粗点を極端に少ないものにするか、実際の得点より低めるものであると考えられる。よくみせようすると得点が高くなるといわれているKとLとは、H<sub>s</sub>粗点は逆相関を示しているが、Lの方は特に低い。H<sub>s</sub>尺度は元来、臨床診断尺度であり、H<sub>s</sub>粗点の高い場合は、態度のほかは病状そのものを示しているのかもしれない。相関係数で判断することは間違っているのかもしれない。しかし、よくみせようすれば、H<sub>s</sub>は著しく低い得点を示す傾向にあると推定するに難くない。

## V 結 び

以上、MMPIにおける回答の信頼度を検討するのに必要な尺度を吟味してきたが、適性検査という事態で行なわれた結果を分析したもので、検討を加えた前記の各尺度の得点がはたして、検査を受けるときの態度を表わすものか、パーソナリティ特性を反映しているものかはつきり断定することはむずかしい。L, F, Kの各尺度は特定のパーソナリティ特性を示すものであると考えられないではなく、もしそういう可能性があれば信頼度のあるプロフィールまでも妥当性がないとして考えられる危険がある。その危険を除くためF-K指標のように2つの尺度を組み合わせる必要がある。Gough<sup>(2)</sup>の結果はこの小資料でも支持できそうであるが、いずれにせよ、回答の妥当性を検討する資料としては不十分である。むしろ、被検者に、故意に一定の態度をとらせ、統制された条件のもとにMMPIを実施し、回答の信頼度を検出する尺度あるいは指標がどのように得点の変化をきたし、相互にどのような関係を示すものかを明らかにした方が事実を一層はつきりさせることができるであろう。

Eysenck<sup>(1)</sup>は回答のごまかしを発見する方法としてL尺度の使用を強調しているが、本資料の示唆するように多くの手がかりがあるわけで、L尺度だけでは不十分である。また回答のごまかしは、望ましい方向、好ましい方向だけに働くとはかぎらない。場合によってはその逆も考えられる。MMPIではK修正という手段が用いられているが、なにかの理由で、病状を誇張したり、好ましくない方向に歪めようとする態度をもつて回答した被検者には、K修正では十分な効果をあげることができるであろうか。妥当性尺度を設ければ回答のごまかし、歪

みの事実を見つけることはできても、そうした答の出現を未然に防ぐことはできない。MMPI のK修正はいわばあと始末ということになるが、片手落ちになるのではあるまいか。歪みの程度に応じてある個人の MMPI の結果を全面的に無視するとか、K修正以外の修正を施すなど、別の手段を加える必要があるように思われる。そのためには、統制された条件下で MMPI を実施し、回答の変質を指摘できる手がかりを確立し、その手がかりの弁別力をはつきりさせねばなるまい。

この小資料を作成するにあたり、いろいろな面でお世話になった東大肥田野直助教授に感謝の意を表わします。

## 文 献

- (1) Eysenck, H. J. : *Sense and nonsense in psychology*. Penguin Books, 1957.
- (2) Gough, H. G. : The F minus K dissimulation index for the MMPI. In Welsh, G. S. & Dahlstrom, W. G. (eds.), *Basic readings on the MMPI in psychology and medicine*. Minneapolis; University of Minnesota Press, 1956
- (3) 肥田野直：テスト法による性格診断——主として MMPI を中心として——，輿論科学協会研究紀要 No. 18, 1957.
- (4) 児玉 省：性格診断法 2．応用心理学会編，心理学講座 7，中山書店，1953.

(1961年 6 月 23 日原稿受付)